

乗用馬の胃原発性扁平上皮癌の一症例

○神林夏実¹、渋谷 久²、古川雅樹¹、齋藤重彰¹、
水上貴裕¹、速水 秋¹、足立 亮¹、天谷友彦¹

¹大和高原動物診療所、²日本大学生物資源科学部獣医学科獣医病理学研究室

【背景と目的】

馬の胃腫瘍は非常に稀であり、馬の腫瘍の約 1.5%程である。馬の胃腫瘍で最も一般的な腫瘍は胃原発性扁平上皮癌(SCC)であり、馬全体 SCC の 3~4%に相当する。今回は内視鏡で胃腫瘍を確認した一症例の経過について報告する。

【症例】

症例は乗馬クラブで乗用馬として飼育されていた中半血(騙馬、14 歳)。過去 11 年既往歴なし。2 月下旬に 40 度の発熱があり抗生剤の投与を開始した。第 22 病日には発熱は治まったが、血液検査で感染所見が認められたため抗生剤を継続した。第 41 病日に再度熱発。食欲不振、顕著な消瘦が認められた。血液検査では白血球 13,300mm³、Glob4.8g/dl、SAA2.5 μg/dl であった。両側肺から軽度連続性ラ音とコメットテールを認めたため、内視鏡検査を行ったが気管支内に異常は無く、肺胞洗浄でも明瞭な感染所見は認められなかった。第 58 病日頃から排尿姿勢を取ることが多くなり、膀胱の内視鏡検査も行ったが異常所見は認められなかった。第 69 病日に 2 次的な胃潰瘍の可能性を考え、胃の内視鏡検査を行ったところ壊死組織を含む腫瘍と出血を確認した。抗生剤の反応も乏しく改善の傾向がなかったため、予後不良と判断し安楽殺処置を行った。

【結果】

解剖では直径 20cm、カリフラワー状の大型腫瘍が前胃部に存在。腫瘍は高度に腐乱した化膿部があり、腐敗臭を伴っていた。また腫瘍は漿膜面をまで達し、多量の繊維性結合組織と出血を伴い肝臓、横隔膜、腎臓に癒着。胃原発の扁平上皮癌は肺、横隔膜、肝臓、結腸、リンパ節に転移が認められた。

【考察】

初期の感染は既に腫瘍が一部腐敗したことによる症状と考えられる。肺に認められたコメットテールは腫瘍の転移が進んでいた結果であった。消化管の扁平上皮癌の報告は少なく、貴重な症例と考えられた。

